

富士山噴火 降砂からの復興

—江戸時代中期—

突然、ものすごい地鳴りがして、家の戸がビリビリと音を立てました。

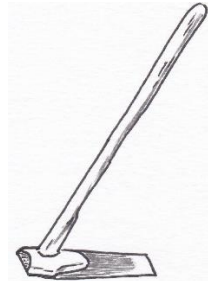
「また、地震か」

北金目村の名主の一人である久右衛門はそう言うと、家の外へ飛び出しました。この

ところ、大きな地震が多く続いていたのですが、今回はそれとは違いました。

外に出てぼうぜんとする久右衛門。

「富士のお山が火を噴いている」





ひばしら

富士山南側の中腹あたりから火柱と黒い雲が立ち上がっています。そうこうするうちに、辺りが暗くなってきました。しばらくすると、雷が鳴り、白い灰が降ってきました。ものすごい音が絶え間なく聞こえてきます。

「大変なことになったぞ」

灰が家に入らないよう戸を閉め、家の中で不安な気持ちで過ごしました。宝永四年（一七〇七）十一月二十三日のことでした。

次の朝、起きた久右衛門は真っ先に富士山に目を向けました。富士山から北東へすさま

じい雲が流れています。

次に空を見上げました。晴れてはいましたが、空からは灰が降っています。灰はしばらく降り続けました。

このとき、北金目村の田畑に積もった灰は、八寸(二四cm)程であったといひます。

「ひどいことになったなあ」

「年貢ねんぐを納めた後でよかったが……」

「だけど、この田畑に積もった砂はどうしたらいいんだ。これでは米も野菜も作れんぞ」

集まった名主なぬしたちは、これからのことを相談しました。

降砂こうさ(火山灰が降ること)が落ちつくと、村では十五歳から六十歳までの男が総動員され、田畑に積もった砂をどかす作業が始まりました。

村には取り除いた砂を捨てる場所がなかったので、灰と土を混ぜて田や畑の中の一部

に集めました。そこを砂置き場すなおと言ひ、その部分の年貢は免除されました。砂置き場は、年を重ねるごとに小さくなりましたが、幕末まで残ったところもありました。

取り除かなければいけない降砂は田畑だけではありません。川に砂が積もると、川底が浅くなり、洪水の危険が増すのです。

中でも金目川は、昔からよく洪水を起す川で、この噴火の少し前にも川の流れを変え、筋替えすじか工事をしたばかりでした。この工事で造られた鈴川すずかわとの新たな合流地点にも砂がたまり、金目川の水が鈴川へ逆流するような事態になっていました。

この金目川に積もった砂を取り除くための工事を、幕府ばくふはお手伝い普請ふしんと言つて何人かの大名だいなみに命じました。実際には、商人しょうじんに請け負おわせ、工事は、賃金やとで雇やとわれた人たちが行うのですが、多くは地元の農民たちでした。

「働いて銭がもらえれば、多少なりとも、被害で減った収穫分の穴埋めにもなって、村人

も助かるだろう」

村の先行きを心配していた久右衛門は、前向きな気持ちになりました。

富士山噴火の記録は、古代からありました。噴火だけではなく、富士山から立つ煙が見えたという記録も多く出てきます。

しかし、宝永四年のこの噴火以降は、こうした煙はあがっていません。

作・画／平塚てづくり紙芝居の会 たもん丸